

●まえがき

弊社の「校閲」という用語の基本的な意味は左記のように主に三点ある。以下に主だったチェックポイントを述べるが、けっしてこれで全てというわけではないので『校正手引』や校閲担当者の指示に従う。

【1】体裁の確認

【2】文字校正

【3】事実関係のチェック

※校閲の基本

ゲラは著者、出版社、印刷所をつなぐ唯一のコミュニケーションツールである。自分だけが読めればよいわけではない。校正記号を正しく使って、相手によく分かるように、簡潔に小さすぎず、大きすぎず丁寧に書く。

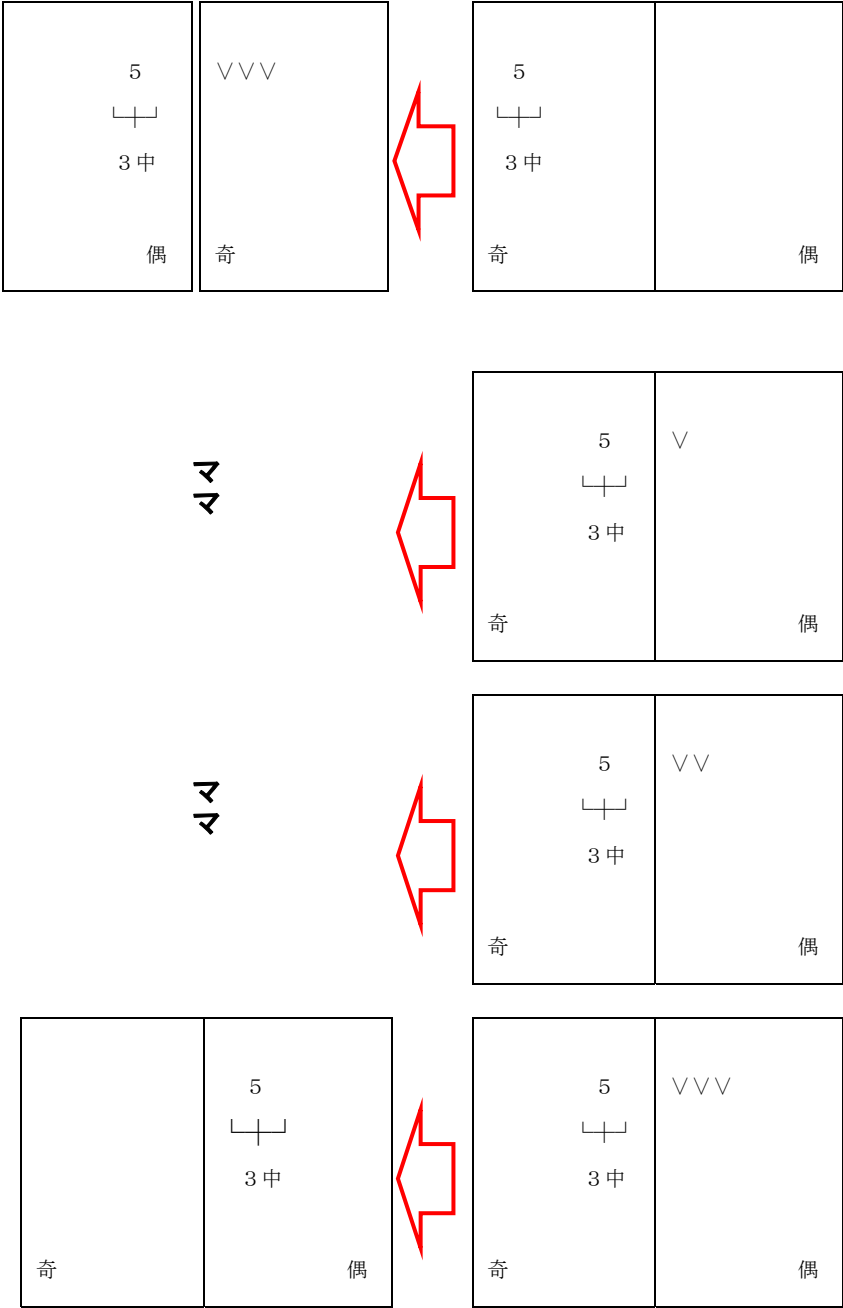
【1】体裁の確認

□本扉

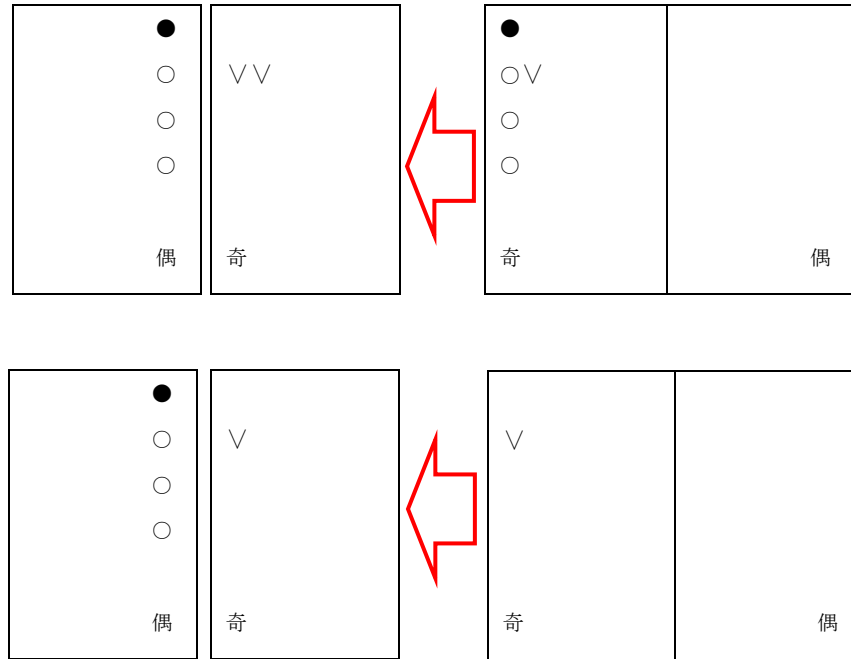
正しい書名が原稿の指定（フォントの指定確認も含む）通り入っているか。著者名はよいか。ただし、単行本では本扉に著名は一般的には入れないので、入っているときは入れるかどうかの疑問出しをする（つばさ文庫など本扉に著者名・イラストレーター名が入る場合もある）。

□見出し

- （1）全体を通して見出し位置、書体が揃っているか。
- （2）数字見出しの場合、数字の重複や脱落がないか。
- （3）追い込みの小見出しが奇数頁の最後に来た場合はそこを空けて次頁冒頭に入れるが、偶数頁の最後に来た場合はそのまま繰り返し入れる。ゲラでは印刷所が偶数頁の最後をあけて奇数頁の冒頭に入れてくることが多いので、そのときは前頁に追い込むように指示をする。



(4) 新書などで多用される二行取り(一行アキ+小見出し)の追い込み小見出しが、偶数頁の最後に来たときは(3)と同じようにそのまま繰り入れる。奇数頁の最後に来た場合は、(3)同様に、そこを空けて次頁冒頭に入れるが、次頁冒頭の一行アキは詰めて小見出しからはじめる。



□目次

各校とも毎回必ず本文と照合をする。見出し、ノンブルは正しいか(ただし、初校などで大幅に頁がずれることがわかっていいるときは見なくてもよい。校閲担当者の指示に従う)。

□ノンブル

通して当たる。間違いがあればその箇所を大きくはつきりと指摘する。該当頁以降の正しいノンブルへの書き換えは書き誤るおそれがあるのでやらない。

□ハシラ

指定通り正しく入っているか。全頁を当たって確認する。

□行アキ

原稿通り行アキがあいているか。行アキは「V」のマークをゲラ中に鉛筆で書き入れて実際に行があいていることを明示する。頁冒頭、頁終末アキがあるときは組版の不注意によりアキが詰められてしまうことがあるので特に注意。

□図版

図番号を各校ともその都度、該当箇所ないし頁に記入する。

□行送り

行送りが発生したときは、行送りの指示はしない。行がずれる箇所に「+1 V」「-1 ^」などの形で明記すればよい。

□字送り

- (1) 字送りの指示は原則として不要。ルビの割れや約物のはみ出しが関係してきたときはその旨を注記する。
- (2) DTP、電算写植とも行の増減のため字詰めを変更するときなどは、一行の中で平均に字間ワリがなされるので該当する行の下に「全角分ワル」「二分分ワル」のように指示をする。活版のように句読点を「二分カエ」のような箇所指定はしない。
- (3) 文庫・単行本とも、基本は句読点は「ぶら下げ」あり。組版の都合で文末に【句読点】や「『』『』」が二分で収まってもOK。字間を調整して「ぶら下げ」にしたり、「全角ドリ」にはしない。

□内の語・文

パーレン○も含めて級数を落とす。○内の語・文は注の場合は級数を小さくし、補足文の場合は本文と同じ大きさにすることが原則。機械的に級数を小さくすることはしない。おかしいとき、区別に迷うときはその旨注記する。

【2】文字校正

□突き合わせ

原則として、原稿を左に、ゲラを右に置く。三〃五字くらいずつ引き合わせていく。このとき左手は原稿をなぞり手を離さない。訂正は赤ペンで右上に引き出す。行間に書いてもよい。引き出しの線は交差させない。あまり長くしない。突き合わせが終わったら素読みをする。疑問点は鉛筆で引き出す。

□素読み

基本中の基本であるが、素読みの際は、目だけで読まずに必ず一度は、指を添えて読む、鉛筆の尻を添えて読む、定規を当てて読むこととする。目だけで読むと間違いがあっても意味を無意識に補って読むので、その間違いに気が付かないことがあり、見落としの原因になる。

□数字表記

- (1) 漢数字単位表記、漢数字並列表記、算用数字表記など数字表記の使われ方に混乱はないか
- (2) 度量衡の換算など計算は合っているか
- (3) 日本年号と西暦は合っているか
- (4) 箇条書きのものは番号が通っているか
- (5) 年譜などの年号と年齢は正しいか

□送り仮名

送り仮名は本則か許容か例外か原稿どおりかは、著者や編集者の意向やレーベルの性質にも拠る。校閲担当者の指示に従う。

□カタカナ語

表記に混乱が生じやすいので注意する。一太郎、Just Right、弊社電子校正のカタカナ語表記一覧などでもカタカナ語のチェックはできるが実用的なレベルではないので使用不可を参考に表記ゆれをチェックする。あくまで表記のゆれとしてまとめる。校正・校閲者の判断でどちらかに統一することはない。

□表記統一

送り仮名も含めて頻出する人称、形容詞、副詞、動詞や名詞などはその表記を統一した方が読者にとっては読みやすくなる。作品の特徴は一つ一つ異なるのでその都度基準を決め、運用していく。あまり表記の統一に気をとられると肝心の誤植や内容のチェックがおろそかになりやすいので表記の範囲を拡げすぎないようにする。表記のチェックは一太郎や Just Right 等を参照して拾うこともできる。

□会話

誰の発言であるか把握しながら読む。会話が長く続くときは、発言者に混乱が生じやすいので特に注意する。

□鉛筆疑問

たとえば、p ■に鉛筆で疑問を入れるときは、必要に応じて、(矛盾では？ p ●、1 ▲と相違)のようになれるだけ簡潔、明瞭にその理由を書いて明示する。p ●、1 ▲の該当箇所には(p ■参照)のように参照先を指示する。また、原稿や前校に解決されないまま残っている鉛筆疑問はそのまま転記する。

□書体

本文にデザイン上の理由などにより教科書体、ゴシック体などを使用する場合は、人名・地名等の固有名詞以外は角川の正字変換リストに拠らずに、JIS 字体のままでも許容する。正字変換リストに拠るのは、あくまで明朝系の書体とする。

□あとがき・解説

あとがき・解説等の前付け後付けがいついてきたら、執筆年月、著者名は必ず確認する。

【3】事実関係のチェック

□内容矛盾

人物相関、時系列、物語の整合性などは必ずメモを作成しながらチェックする。

□事実確認

- (1) 著者の書いていることが本当に正しいかどうかについてチェックする。年号、人名、地名、通りの名前、数値や事実関係など文章の整合性に関することはできる限り信頼できる資料、史料、辞書、辞典、事典、公的な web サイト等で裏をとる。事実関係に齟齬があれば、該当資料をコピーあるいは出力して典拠資料としてゲラとは別にまとめて付ける。ゲラには合番を付し齟齬があることを明示する。典拠資料には、合番とゲラの該当ページ数の両方を大きくはつきりと明記する。
- (2) 歴史小説、ノンフィクション、新書など事実確認の作業が膨大になることが予想できるものについては、事実確認を切り離して別の担当者が控えゲラでチェックを行うこともある。その際は、控えゲラの正ゲラへの転記作業が発生する。
- (3) エッセイや舞台が架空の小説などは、事実関係のチェックがほとんどないようなときもあるが、必ずしもないというわけではない。僅かな事実関係のチェックは正ゲラを担当する校正者の責任となる。

□人名

人名は固有名詞なので表記には十分に注意する。信頼に足る辞書、辞典、事典、書影等に当たり確認する(ただし、小型で薄い判型の簡便な辞書・事典の類は、典拠資料として著者に対して説得力を欠くので使用不可)。また表記に混乱がないか。また別人と入れ違えて使用されていないか。

□地名

地名も人名同様、固有名詞なので表記には注意を払う。信頼できる辞書、辞典、事典等を使用して確認する。また作品の時代背景を考慮して、おおよそ1999年（平成11年）から2006年（平成18年）にかけて起きた市町村の平成の大合併による地名の変更（地名の変更は各地方自治体のHP、または総務省のサイト <http://www.soumu.go.jp/gappei/gappei.html> で確認できる）が反映されていないときは指摘する。外国語の地名に関しても、主流は、現地音表記優先である（中国・韓国についてはまた別基準となるので校閲担当者の指示に従う）。ボンベイがムンバイ、カルカッタはコルカタとなる。

□典拠資料

- (1) 評価の定まっている資料、史料、辞書、辞典、事典、データベース、webサイトを使用する。
- (2) 地名に関しては、角川地名大辞典、日本行政区画便覧などは使用可とする。
- (3) 小型で薄い判型の簡便な辞書・事典の類は、典拠資料として著者に対して説得力を欠くので使用不可とする。
- (4) webサイトを典拠資料とする場合、公式、公的なサイトを典拠として使用する。Wikipedia、掲示板、個人運営のサイト、ブログなどは使用不可とする。
- (5) 資料の出典を必ず明記する。一般的な辞書等を除く書籍・雑誌等は奥付頁をのコピーを添えるか、または典拠資料のコピー余白に書名・著者名・出版社・発行年を明記する。webサイトの場合はURLが明記されているか確認する。途中で切れないようにする。

□引用

引用は引用原本に当たってチェックする。左記のように著者による曖昧な記憶による引用は事故の原因となる。できるだけ引用原本は弊社で用意したいが、用意できないこともある。



asahi.com

子どもたちがつくる きつず☆

天気 辞書 地図 サイト案内 アクセスTop

文化・芸能 社会 スポーツ 経済 政治 国際 サイエンス 文

文化ニュース 芸能ニュース ロイターニュース 日刊スポーツニュース 芸能ビデオニ

住まい | 仕事・資格 | BOOK | マネー | 健康 | 愛車 | 教育 | ネット | オフタイム | 囲碁・将棋 | be | コラム

home>文化・芸能

宮本輝氏、小説での引用に事実誤認 お詫びと訂正を公表

作家宮本輝氏の小説「約束の冬」(03年刊行、文芸春秋)で、在野研究者・錦三郎氏の著書「飛行蜘蛛」(72年刊行、丸ノ内出版)を事実誤認して引用したため、出版元の文芸春秋と宮本氏は12日付で、「お詫(わ)びと訂正」を公表した。早急に訂正版を刷る。

「飛行蜘蛛」について宮本氏は、「著者は『蜘蛛の子が糸と風と上昇気流を利用して遠くへ飛び立つことに成功した例を自分はずいに見なかった』と書いている」と記したが、原著にこの文章はなかった。他にも不正確な記述が多い、と錦氏の遺族から指摘された。

宮本氏は「まったく私のミス。思いこみで間違った」としている。

錦氏の長男で山形県立米沢東高校長の啓氏は「亡父はクモが飛び立つところを何回も目撃している。謝罪文は事実誤認を認めただけで父の名誉が回復されたとは思えない」と話している。(02/13 23:57)

□音楽著作権

音楽著作権の使用が発生するしないに拘わらず、歌詞の引用については、「著作権OK?」などとチェックする。著作権使用の申請をするかどうかの最終判断は編集部が行う。

□差別的表現

弊社に差別的表現と呼ばれるものをまとめた資料等はない。いわゆる「言い換え集」は一面として便利には違いないが、それがなぜ差別的な表現になるかということを考える機会を奪うことになるからである。そのため校閲者の自己判断によりあるいは弊社電子校正の差別的表現のチェックを参照して、差別的表現と呼ばれるものは、できるかぎりチェックする。表現を言い換えるかどうかの最終判断は編集部と著者にあり、校閲者としては注意喚起が責務となる

37 第3社会 13版 2000年

市民団体

「差別用語含む」指摘
岩波文庫が出荷停止

アフリカで医療伝道に従事した故アルベルト・シュバイツァー氏の著書「水と原生林のはざまで」をめぐり、出版元の岩波書店（東京都千代田区）が、同書中にある「土人」の表現が人種差別的だとする市民団体の指摘を受け、出荷を停止していたことが十一日、わかった。岩波書店側は「認識不足で弁解の余地はない」としており、今後、原文と翻訳文の照合などの見直しを進めたいうえで、新版として再出版する方針。

同書は、一九一三年にシュバイツァー氏がアフリカに渡り、妻とともに現地住民の病氣治療に従事した記録。同書店からは「岩波文庫」として、五七年に第一刷を発行し、これまでに三十八刷を数えるロングセラーになっている。文中に「土人」の表現が頻出しており、大阪府堺市の市民団体「黒人差別をなくす会」（有田喜美子会長）が「差別的な表現だ」と指摘。同書店が今月四日に出荷停止を決めた。

□署名

グラ冒頭頁の右下にグラ戻し日付と自分の名前をフルネームで書く。記号や略称は不可。